

生物情報科学科の新設

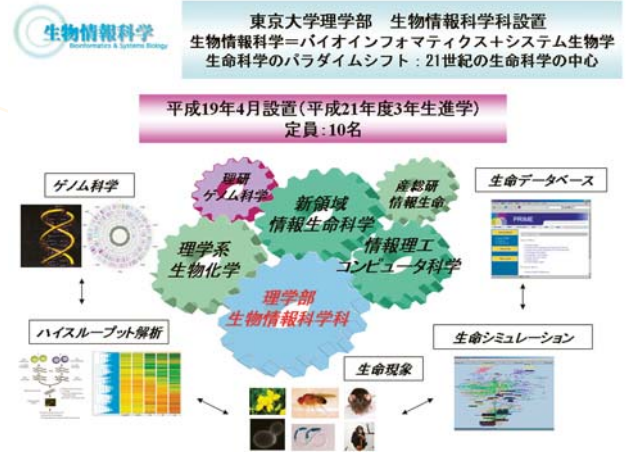
■ 程 久美子 (生物化学専攻 助教授)

生物情報科学というのは、バイオインフォマティクスとシステム生物学からなるもので、いわば生物学と情報学が融合した、新しい学問領域である。研究内容としては、生体内での物質の相互作用や外部からの刺激による細胞内動態のシミュレーション、ゲノム研究におけるDNA配列解析の結果などを実証しようとするもので、膨大なデータを体系的に扱う点が従来の生命科学と大きく異なる点であり、これからの時代に要求される領

域といえるだろう。学科設立に先立って、本学理学部では、文部科学省科学技術振興調整費による「生物情報科学学部教育特別プログラム」(2001年度～)が実施された。

このプログラムは、厳しいカリキュラムであったにもかかわらず、多数の修了者を輩出したことから、生物情報科学研究に精通した人材が社会的にも大きなニーズがあることが窺える。このような状況を受けて、理学部内の各学科の支援のもとに、2007年度より、学年あたり10名の定員を擁する生物情報科学科が

理学部内に新設されることになった。新学科は、生物情報科学科専任教員のみではなく、生物化学科や情報科学科、さらには新領域創成科学研究科情報生命科学専攻の教員の協力で運営される。



山川健次郎元東京帝国大学総長の胸像贈呈式が行われる

■ 広報誌編集委員会

山川健次郎元東京帝国大学総長の胸像贈呈式が、2006年12月21日(木)11時30分より理学部1号館正面玄関前において行われた。式は、胸像を寄贈して下さった福田宏明氏(山川元総長の曾孫)ご夫妻、服部艶子氏(山川元総長の孫)、佐藤慎一理事・副学長、理学系研究科長、副研究科長および物理学専攻長など関係者出席

のもと、岩澤研究科長の挨拶に続き、寄贈者の福田氏および服部氏より岩澤研究科長に胸像が手渡され、理学部1号館前の植え込みに作られた台座に設置された。

山川健次郎元総長(1854～1931年)は、東京帝国大学理科大学校(現在の東京大学理学部)における日本人初の物理学教授で、その縁で今回の設置場所となったものである。

昨年5月、福田氏および三木教子氏(山川元総長の孫)より、山川先生ゆかりの文書や写真など24点と、先生の物理学の教科書の原稿など7点の寄贈を受けた。



福田宏明氏(左手前)および服部艶子氏より、岩澤研究科長に胸像が手渡される様子

今回の贈呈式は、そのうち胸像を設置するにあたり行われたものである。

寄贈内容および山川元総長のご経歴等は、本誌2006年7月号4頁に掲載されている。

21世紀 COE 国際シンポジウム 開催される

■ 飯野 雄一 (遺伝子実験施設 助教授)

21世紀COEプログラム『『個』を理解するための基盤生命学の推進』の成果発表を兼ねた国際シンポジウム、“Frontiers of the Biology of Uniqueness: Development, Sensory Responses and Reproduction”が2006年11月11日(土)、理学部2号館

講堂で開催された。COEのメンバーとして生物科学専攻より福田裕穂教授、武田洋幸教授、塚谷裕一教授、生物化学専攻より山本正幸教授、坂野仁教授が、COEプログラムにより得られた卓越した成果について講演を行った。

海外よりコンラッド・バスラー教授(Conrad Basler, チューリヒ大)、サム・キューンズ教授(Sam Kunes, ハーバード大)、ウィリアム・チャ教授(William Chia, シンガポール国立大)をお招きし、発生過

程におけるシグナル伝達、神経可塑性の機構、細胞の不均等分裂の各テーマについて最新成果の講演をいただいた。両専攻をはじめ理学系の学生、教員のみならず、他の研究科や大学、研究機関から多くの来聴者があり、午前午後にわたって活発な討論がくり広げられた。海外よりの講演者には前日に、大学院生向けに各専門分野における基礎知識の講義をお願いした。これにより学生らも活発に討論に参加することができ、貴重な機会となったようである。

第10回理学部公開講演会 「時間の科学」開催される

■ 関根 俊一 (生物化学専攻 講師)

去る2006年12月2日(土)、第10回理学部公開講演会が本郷キャンパス安田講堂にて開催された。今回はテーマを「時間の科学」とし、時間をキーワードに理学系研究科で行われている研究を紹介する企画とした。これまで秋の講演会は金曜日の夕方に開催してきたが、今回はじめて土曜日の昼の時間帯で行った。これまでを大きく上回る600名近い聴衆に

来場いただき、一般向けの講演会としては大成功だったといえるだろう。

まず地球惑星科学専攻の横山祐典講師による「地球環境変動と年代測定」、続いて生物科学専攻の武田洋幸教授による「動物のからだを刻む分節時計」の2講演が行われた。最後に、第10回記念特別講演として、海部宣男国立天文台名誉教授に「ひろがる太陽系：惑星の新しい定義をめぐって」と題して最近、話題となった惑星定義の問題についてお話いただいた。異なる分野からの講演であったが、いずれも平易でわかりやすい内容で、基礎科学の多様性と面白さを十分に伝える

ことができたのではないと思う。

今回の講演会では、土曜日に開催したこと、記念講演を設けたことなどいくつかの新しい試みがあったが、もうひとつの目玉として設定したのが、講演会終了後の講師との「歓談の時間」であった。講演終了後、希望する参加者に残ってもらい、講演中の短い質疑時間では解消されなかった質問や日頃の疑問などを直接、講師にぶつけてもらおうという企画である。中高生から年配の方まで多くの人たちが残って各講師を取り囲み、双方向のコミュニケーションをとれるめったにない機会を楽しんでいたようだ。コーヒーやお菓子も用意され、和やかな雰囲気ですら終了時間も忘れて会話が花が咲いていた。

当日は天候にも恵まれ、予想をはるかに上回る聴衆に来場いただいた。とくに社会人の参加が多かったが、今後の課題としてはより若い層の人たちにも発信していけるような工夫も必要かと思われる。最後に、企画と準備、実行に携わった学生および職員の方々に、この場を借りて感謝の意を表したい。



■ 講演に聴き入る聴衆

天文学教育研究センターの 特別公開日

■ 半田 利弘
(天文学教育研究センター 助手)

天文センターでは発足以来、毎年1回、国立天文台・総合研究大学院大学と共催で研究活動の紹介などを行っており、三鷹キャンパスの特別公開日と称している。2006年は10月28日(土)に行われ、天文センターだけで1000名を越える見学者が訪れた。実験室の一部を含む、教育研究棟の1階を公開場所にあて、研究活動や研究成果、研究プロジェクトの紹介を行った。

公開日は研究の現場から直接、情報発

信できる数少ない機会である。このため、天文学や天文観測の実際を紹介する講演会、恒星から宇宙論に及ぶ研究成果を紹介するパネル、PCを利用したTAOプロジェクト(東京大学アタカマ望遠鏡建設計画)の紹介、実物による観測装置

の紹介などを行った。各展示に対し、教員や大学院生の説明に熱心に耳を傾ける見学者が多く見られ、おおむね好評であった。来年もいっそうの工夫を凝らし、来場者の内容理解と満足がより得られるものとした。



■ 来場者でにぎわう公開日当日の様子